126.COVID-19重症者に対して早期リハビリテーションプロトコルを導入した効果

研究の概要

COVID-19 (新型コロナウイルス)に感染して重症化した患者の多くは、ICUに入院し人工呼吸を中心とした集中治療を受けています。集中治療に関連した鎮静やベッド上安静といった要因によって「コロナ後遺症」という形で、退院後の身体機能障害や不安、抑うつという症状が残存することが問題視されています。当院ICUも、県内のCOVID-19感染者の重症例を受け入れて集中治療を行なっています。受け入れ当初の治療経験から、入院前に自立した生活を送っていた患者の身体機能が、退院時に著しく低下していました。COVID-19重症例に対する人工呼吸は、筋弛緩や深い鎮静を必要とするために不動状態が長期となり、筋力低下を起こしていると考えました。この対策として、鎮静の深度に応じたリハビリテーションプログラムとプロトコルを作成し、早期から看護師によるリハビリテーションを開始しています。本研究では、COVID-19重症者に対する早期リハビリテーションプロトコルを導入し、早期介入した効果を明らかにし、今後起こり得る第4波のケアに活かしていくことを目的としています。

研究の目的と方法

本研究は、COVID-19重症者に対して早期リハビリテーションプロトコルを導入した効果を明らかにすることを目的とします。令和2年11月1日～令和3年2月28日に、当院ICUに入院されて集中治療を受けられた患者様の診療録と看護記録の情報を用いて、集計や簡単な統計処理を行う研究です。研究に用いるデータは、COVID-19感染重症者の離床を開始した時期やICUに入院した期間、退院時の日常生活動作等であり、個人を特定可能な情報は解析に用いません。

本研究の参加について

本研究への参加・不参加に関わらず、利益・不利益を生じることはありません。個人を特定可能な情報は解析には使用されず、データは個人情報を削除し、匿名化した状態で取り扱います。本研究への不参加をご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。

調査する内容

患者背景、人工呼吸した期間、離床を開始した時期、ICUに入院した期間、退院時の日常生活動作などを調査します。

調査期間

研究対象期間:令和2年11月1日～令和3年2月28日
研究実施期間:倫理委員会審査承認後～令和4年3月31日

研究成果の発表

調査した患者様のデータは集団として分析され、学会発表などで公表されます。しかし個人が特定されることはありません。

研究代表者

国立病院機構熊本医療センター　ICU副看護師長　前川友成

当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター　ICU看護師長　竹下弘子

問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター　ICU副看護師長　前川友成
TEL：096-353-6501